

「一粒のブドウに込められた思い」

国分寺中学校 1年 宮崎 翔さん

毎年、僕の祖父母は、お世話になった人にお中元としてブドウを送っている。そのブドウは国分寺で作られていて、作っている人は祖父母の親戚にあたる人だ。今年もその時期がやってきたため、僕は祖父母と一緒に山にブドウを取りに行った。そこで作られているブドウを祖父は日本一のブドウだといっていた。僕もよく食べていたので同じように感じていた。

ブドウを作っているところに着くと、おじさんが準備していたブドウを見せてくれた。それは本当においしそうで、ただけでも日本一のブドウと分かるものだった。そこにはいろいろな品種のブドウがあり、いくつか味見をさせてくれた。おじさんは、

「これは今年からやっと売り物になったんだ。二度と食べられないかもしれないぞ。」

といって一粒渡してくれた。食べてみると甘みの中にほのかな酸味があって、とてもおいしかった。いろいろ話をした後、おじさんが僕にきれいなピオーネを一房手渡してくれた。僕はおもわず「ありがとうございます。」と声がでた。このブドウはこれまでもお中元を買うついでに、祖父が家族のために買ってきてくれていて、高価だということを聞いていた。そんな高価なブドウを僕に一房くれたことにとてもうれしくなった。

帰る途中、僕は祖父にどうしてブドウをくれたり、味見させてくれたりしたのか尋ねた。すると祖父は今から十年前の出来事を話してくれた。

僕が四歳の時に国分寺町では台風の被害によって、本津川の水があふれて、洪水被害にあい、多くの家が水につかったそうだ。幸い僕の家は本津川から離れていたため、被害はなかったが、ブドウを作っているおじさんの家はたくさんの土砂が家の中に入ってきたそうだ。その時、祖母が数日家の片付けに出かけたということを教えてくれた。その時のことを今でも感謝してくれているからだと話してくれた。

僕はその時、この国分寺町でもそんな大変な災害があったということを知り、とても驚いた。テレビのニュースなどではよく目にするものの、自分の生活とは全く遠いものだと思っていた。それがこの国分寺でも起こっていたことを知り、自分が災害に対して、どれだけ準備をしていないかということにも気づいた。そこで、その時の様子を、改めて父に聞いてみた。

すると、その時は国分寺だけでなく高松市内や坂出でも大きな被害があったことを知った。また、その後も何回か川の水が氾らんして、自分の家の近くでも、床上浸水したことを知った。ますます他人事ではないと感じるようになった。

この夏のニュースでも東北地方でこれまで経験したことのない雨が降って、土石流が起り、多くの人の命が失われたことがあった。また、高知県の四万十市では観測史上最高の四十一度という気温を記録した。異常気象という言葉通り、いつどこでどのような災害が起こるか分からないということを感じた。また、祖母にそのときの話を聞くと、

「家中に土砂が入り込んでいて、本当に大変だった。家族の人たちだけでするのは絶対無理。いろんな人が手伝ったから何とか片付いた。」

と話してくれた。その話を聞いて、自分だけが被害に遭わなかったからよかったと思うのではなく、共に助け合う気持ちが大切だということを強く感じた。

僕の住んでいる場所は、川からも少し離れていて、周りよりも少しだけ高いところにある。祖父や父からも、ここが水につかることはないだろうという話をよく聞いていた。だからこそ、僕は二つのことを強く感じた。まず一つ目は万が一に備えて準備をしておくことである。いつどこで災害が起こるか分からない。そのために準備をしておいて損をすることはしない。もし近くの川が氾らんしたときにはどこに避難すればよいか。まだ、移動できなくなったときのための食料や懐中電灯等の準備をしておくことなどが大切だと感じた。

もう一つが、もし災害になったときには共に助け合うことである。僕の近くには自主防災組織という組織があるそうだ。自治会で互いに助け合う組織ができているらしい。自分たちだけが助かったから喜ぶのではなく、困っている人を救える人にもなりたいと感じた。

おじさんからもらったブドウ一粒一粒に、おじさんの苦勞と共にたくさんの人の協力が詰まっていることを知った。その思いを込めて作っているからこそ、日本一のブドウができるのだと感じた。ブドウを味わいながら、多くの人の協力を一緒に感じ取ることができた。